



小倉 孝誠

おぐら・こうせい 1956年生まれ。仏文学者。慶応大教授。著書に「歴史をどう語るか」など。訳書にユゴー「死囚刑最後の日」など。

として演出してきたのだ。都市がみずからをスペクタクルとして提示するのには、五輪の開会式ほどさわしいイベントはない。

□ □ □

17、18世紀の王政時代には、国王が戦勝記念や王太子の結婚祝賀のために、セーヌ川で巨大な凱旋門や神話が再現された。また19世紀後半からは、産業イベントである万国博覧会がセーヌ川とその周辺で展開した。今回の開会式で重要な舞台になったエッフェル塔、シャイヨ宮、グラン・パレ、アレクサンドル3世橋はすべて万博を機に造られたものだ。

パリはそうした歴史建造物を最大限に活用しながら、五輪のディスプレイ装置にまわっていった。セーヌ川は祝祭と親和性が強く、したがって開会式の舞台に選ばれたことは何の不思議もない。

平和の祭典五輪が、平和への呼びかけを発するのは当然である。川の上

の舞台で反戦的な「イマジン」が歌われたのは、その一例である。しかしそれだけでなく、フランスは一連の場面をつうじて、いくつかのメッセージを発した。まず政治的なメッセージとしては、絶えざる変革への意志が示されていた。選手たちを乗せた船が出発後まもなくその横を通るコンシェルジュリは、革命時代にマリ・アントワネットが幽閉された、そこから断頭台に向かった建物である。テーマとして掲げられた自由、平等、友愛は革命時代の標語であり、その後フランス共和国の原理と

□ □ □

なっている。共和国はしばしば、三色旗を手にしたマリ・アントワネットというたくましい女性

の姿で象徴化されるが、開会式では、グラン・パレの屋根のうえで、女性歌手がフランス国歌「ラ・マルセイーズ」を朗々と歌いあげた。赤と白のドレスをまとい、青い旗を持った彼女は、まさしくマリ・アントワネットの寓意にほかならない。

□ □ □

社会的なメッセージとしては、多様性と連帯が重要なテーマとして掲げられた。とりわけ主催者が、女性たちの連帯「シスターフッド」を強調したのが、印象に残る。中世から現代にいたるまでに活躍した女性の作家、政治家、映画監督、スポーツ選手など、10名の像が水中から浮かび上がった。その最後に登場したシモーヌ・ヴェイユは、1970年代に人工妊娠中絶を合法化した厚生大臣である。

文化的メッセージもふんだんに盛り込まれていた。事前に作成されたトリッキーな映像の中で、旧国立図書館の机や書架で、若者たちがフランス文学の傑作を手に取り、ルーヴル美術館に所蔵される有名な絵画から抜けだした人物たちが、窓から開会式を眺める、という趣向が面白い。

聖火リレーの最後では、聖火台代わりの気球が空中に浮かびあがるが、これは18世紀末に熱気球を発明したフランス人モンゴルフィエ兄弟への敬意の表現だろう。文化遺産を世界に知らしめる酒落た演出だった。他方で、主催者は開会式を、フランスの歴史を称賛する手段にはしなかった。たとえばノートルダム大聖堂は、英雄や偉人が活躍した記憶の場

としてではなく、修復作業の場として現れた。歴史建造物を、現代フランス人が活動する空間、つまり市民の空間として演出したのである。現地では、キリストの最後の晩餐を風刺し、共和国の品位を汚す場面があったとして、教会当局や保守派から批判の声が上がった。私自身は、その

うした批判は予期したうえで、大胆で独創的な演出だったと思う。華やかな歌やダンスと同時に、友愛と寛容への呼びかけ、変革への断固たる意志、自国文化への誇りがしつかり表現されていた。祝祭性と社会性が調和したイベントとして、五輪の歴史に残るだろう。

夕空の下 セーヌは流れる

パリ五輪が開幕した。予定どおり、開会式では、各国選手団が船に乗ってセーヌ川を下り、会場となるトロカデロ広場に集まるというセレモニーが展開した。夏季五輪の歴史上はじめて競技場外で開会式が行われたというので、話題になっていた。雨に見舞われるという不運はあったが、斬新な演出と舞台装置は、その場にいた観客と、世界中のテレビ視聴者を魅了したにちがいない。私も大いに楽しみ、同時に、フランスについてあらためて考えさせられた。

さまざまな困難が予想されたのに、なぜセーヌ川とそこに架かる橋を開会式の舞台にしたのか、と訝しく思ったひとは多いだろう。そこには理由がある。

パリの中心部を東西に横断するセーヌ川は、パリの長い歴史において市民の生活空間だった。そして政治と文化の中心たる首都パリは、この川をさまざまな祭典をくりひろげる舞台として利用し、みずからを祝祭都市